『こころ』

夏目漱石

「Kはなかなか奥さんと御嬢（おじょう）さんの話を已（や）めませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変っている所に気が付かずにはいられないのです。私はとうとう何故（なぜ）今日に限ってそんな事ばかりいうのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫（ふる）えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何かいおうとすると、いう前に能（よ）く口のあたりをもぐもぐさせる癖（くせ）がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易（たやす）く開（あ）かない所に、彼の言葉の重みも籠（こも）っていたのでしょう。一旦（いったん）声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちょっと眺めた時、私はまた何か出て来るなとすぐ疳付（かんづ）いたのですが、それが果して何（なん）の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚ろいたのです。彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働（はたらき）さえ、私にはなくなってしまったのです。

その時の私は恐ろしさの塊（かたま）りといいましょうか、または苦しさの塊りといいましょうか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われた位に堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後（のち）に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策（しま）ったと思いました。先（せん）を越されたなと思いました。